

ご命日に聞くと

インターネットの普及がもたらしたものは、便利な情報ツールという点だけでなく、情報過多と作業及び判断の加速化による、人間関係や価値観の大きな変化でしょう。これが仏事においても多大な影響をもたらしていることは、既に皆さんご存知のことと思います。さらに貧困問題に直面し、人々の経済観念がシビアになりつつあります。葬儀における出仕僧侶数・相続講金(院号申請)・中陰や月忌参り等の減少と、仏事にかかる経済的負担をなるべくコンパクトに、また儀式等を軽んずる傾向が見受けられます。残念ながら一部の現代人にとって仏事は「わずらわしいもの・負担となるもの」となっているのではないのでしょうか。加えてお寺を支えていこうと尽力下さるご門徒の高齢化や減少、世代交代に対する不安要素や、過疎・過密の問題もあります。そのような傾向の中で、寺院で行われる法座へ足を運んでいただくことは、より難しくなってきました。

これまで真宗寺院は、報恩講や二十八日講を通して宗祖親鸞聖人の御命日を大切にし、法座を開席することで宗祖の教えを確かめ直すことよって、宗祖の御命日が法縁となってきた歴史があります。また、人々とお寺の出会ひの多くも亡き方を縁としています。そのご命日も法縁と言えるでしょう。宗祖の御命日も大切な方のご命日も、同じ大切な法縁です。それならば、お寺での法座も各ご家庭で行われる仏事も、大切な法座の場と言えます。

「ご命日」に出会っていききたい、このように思っております。それを教区の皆さんと共有したく、部会員が聞き書きさせていただいた「ご命日」のお話を不定期に『北海真宗』誌面また『親鸞Mag』にて掲載します。宗祖や有縁の方々の「ご命日」を大切にすることは、企画部会6期から7期を貫く中心課題「法縁の過疎」を考えることにつながります。

さて、現代社会が私たち僧侶に求めているものは何でしょうか。実はとてもシンプルで素朴な、しかし真摯な姿だと思えます。第6期企画部会が行ったグリーンフケア公開講座において、講師の尾角光美氏(一般社団法人「リヴオン」代表理事)は僧侶のことを「喪の旅の伴走者」と表現しました。この言葉は、遺族そしてグリーンフケアに携わる側としての尾角氏から僧侶へのエールではないでしょうか。しかし時には、自分の都合で月忌参りが日々のルーティンと化してしまうことも否めません。また、同じく6期のグリーンフケア公開講座講師酒井義一氏(東京教区存明寺住職)は尾角氏の言葉を受けて、僧侶を「苦悩の現実を生きる求道者」としています。「自分が人に対して何かしてあげるといふ立場に立つのではなく、僧侶自らが苦悩満ちあふれる現実を生きる一人の求道者に立ち返る。苦悩を抱える一人として自分が道を求める者に立ち返る。」と語られています。「一人の求道者の道を求める姿勢が、他に対しての確かで静かな教化になっていく」という言葉との出会いによって喚起された表現です。

お二人の言葉をかりるならば、真宗僧侶は伴走者であり求道者たらんことを願われているのでしよう。日々の法務を丁寧に積み重ね、共に歩む姿をご門徒から待たれていないのではないのでしょうか。そしてこの「ご命日」の取り組みが、亡き方や僧侶、そして真宗に対しての様々な思いに気づかせていただくことではないでしょうか。法縁である